

そこで次に「㊦『菅家後集』「492元年立春 十二月十九日」前後の漢詩群を通して見えてくるもの」に論を進める。

この作品の置かれている前の詩に目を移すと「489白微霰」（七言律詩）「490雪夜思家竹」（十二韻）「491聴寺鐘二月（十二月の誤字か。）十七日」（七言絶句）があり、後には、「493南館夜聞都府禮佛懺悔」（七言絶句）「494歳日感懷」（五言律詩）「495梅花」（七言絶句）と続く。筆者は既に「489白微霰」以外は全詩注釈を施した拙論を公表してきた。ここでは重複を避け、それぞれの詩に込められている道真自身の心情に視点を絞って考察をしてみる。

「489白微霰」では、「霰」を第七・八句で「袖中收拾して慇懃に見れば／応に是れ、氷と為れる涙の未だ乾かざるなるべし」と詠む。「490雪夜思家竹」では、既以後藤昭雄氏が指摘されている（注7）十三・十四句で京にある竹を思つて「直を抱けど自ら低迷し／貞を含めど空しく破裂せり」と自己投影を暗示する句作りをし、二十一・二十二句で「千万言へども効無からん／亦漣湍し嗚咽す」と詠む。「491聴寺鐘」では三・四句で「大いに奇しむ 春夏秋冬盡きても／我が為には終に拔苦の聲無きを」と詠む。「493南館夜聞都府禮佛懺悔」の二句で「我は泣く 天涯放逐の辜」四句目では「発心北に向かひ只南無のみ」と詠む。「494歳日感懷」では七・八句で「合掌して観音を念じ／屠蘇あれども盃を把らず」と詠み「495梅花」では三・四句で、「人は是れ同じ人 梅は異なる樹／知りぬ 花のみ笑みて我には悲しみの多きを」と詠む作品が配列されている。いずれの句も自然の事象や自然物に触発されて自分の心情を吐露している作品群である。しかしながら、己の今の置かれている状況からくる悲しみを直情するものから、これを仏教への救いに変移させる心情への変化は見られるものの、何かにすがつて望京の念を吐露する心情は読み取れない。むしろいかんともしがたい現実を前に、それを受け入れるしかない、それを諦念に置き換えられるものならそうしたい切ない心情にさいなまれている時の作品がこの「492元年立春」で